文字の修得と習学

2006.06.09～2009.06.16更新

萩原　義雄

かなについて

文字を習学することを「手習い」と言います。「手習い」にはどのような文字を教えているのか、その手掛かりとなる記述が『宇津保物語』(国譲之巻・上)に見えます。

かゝるほどに、「右大将殿より」とて、手本四巻色々の色紙に書きて、花の枝に付けて孫王の君の許に御文して有り。(中略)見給へば、黄ばみたる色紙に書きて、山吹に付けたるは真の手、春の字、青き色紙に書きて松に付けたるは草にて、夏の字、赤き色紙に書きて夘の花に付けたるは仮名、初には男手、放書に書きて、同じ文字をさまざまにかへて書けり。〔大系本三・一〇一①～一〇二頁②〕

これは、主人公の清原仲忠が、若宮の手習いをはじめるに用いる手本四巻を書いたところです。「真」は楷書、「草」は漢字をくずした草書、春夏の字を楷書と草書の両様で示し、お手本としてお上げになったのでしょう。つぎに「男手」「女手」でもない赤い色紙に書かれた「仮名」の表記手法がその書き様なのです。

ここで「男手」とは、前に学習した一字一音式の「万葉仮名」を言うようです。すべて漢字で表記されていますから、男性専用の文字すなわち漢字、漢文といった捉え方なのでしょう。これに対し、「女手」は、女性専用の文字ということで、後の「平仮名」になります。『枕草子』や『源氏物語』などの王朝女流文学作品には、「かな・かんな」で書かれています。この「男手」と「女手」の文字以外にどちらともいえない「草仮名」と呼ばれる表記手法が存在したようです。さらに、『宇津保物語』には、「片仮名・葦手」などの文字表記が示されています。「片仮名」は、漢字の一部使用によって成り立ったことはすでに紹介しました。も一つの「葦手」については、貴族階級の人々にもてはやされたようですが、その実体は明らかではありません。おそらく文字遊戯のなかで発達した文字ではなかったのではないでしょうか。そして平安朝の貴族社会で流行はするものの、後世に引き継がれていかない文字ということからも遊び文字だったのではないかと考えられています。

万葉仮名の表記は日常茶飯事で使われていたことは、「木簡」が示しています。そのなかには、和歌を表記したと思われるものがあります。

津久余余美宇我礼□□□……(月夜よみうかれ……)

田延之比等等等流刀毛意夜志己己呂曽(絶えし人と取るとも同じ心ぞ)

＊この木簡資料は、天平十七年(七四五)四月から十九年八月までの三年間に集中しています。

和歌を記したと思える木簡がそれも年月がはっきりした形で見出されたことは、たとえ断片的資料かもしれませんが貴重な内容を示しています。俗世間にいう平仮名は弘法大師空海が作り、片仮名は吉備真備が作ったなどと言ったことがいかに誤った説であったかを知らしめています。

ところで、かな文字を女性が使用するのが普通であったときに、男性がこれを眞似て書くこともありうるわけです。このかな文字で書いた最初の日記をこの世に遺した人物こそが、あの『古今和歌集』の選者の一人である紀貫之であったからこそ、今日に伝承されてきているのでしょう。

当代一流と言われた紀貫之は、愛娘を任地で亡くし、その悲しみを乗り越える手段として娘に換わって旅の日記を綴りました。これがあの『土左日記』(九三四年十二月―九三五年二月の記事)です。この書き出しは、

をとこすなる日記といふものを、をむなもしてみんとてするなり

男の自分が女の手で日記を書くというある種の宣言文です。この日記中に用いられている文字数は、一万二

千五百字。使用漢字数はわずか六十二字にすぎません。文字通り、娘の心魂でつづったものでありました。

この創作方法がやがて、女流日記文學として定着することにもなっていくのです。ちなみに、女性の手で最初に成った作品は何かと問われれば、道綱の母である藤原倫寧の女の書いた『蜻蛉日記』でありました。

貴族階級とことば教育

紀貫之は、平安朝時代を代表する歌人でもあります。彼らがどのような教養を身につけていたのか、そして教養の必要性はどこに主眼がおかれていたのかを次に考えてみたいと思います。そうです。学問の発展と普及は、ことばの問題に密接に関与しています。そこで、平安時代の学問とはどういうものか少しく考えてみようと思います。

天皇は位につくまでは、大學寮の長官という地位にあります。いまの文部大臣であり、東京大學学長といった文教最高責任者というものです。ですから、政治を掌るに必要な學問・教育に熱心になるのも当然のことです。中国から得た知識をふんだんに日本の政治に取り入れていく姿勢がこの學問教育のなかで培われていくことになります。

天平勝寶三年(七五一)に編纂された『懐風藻』という日本最初の漢詩文集の序文に次のような文章が見えています。

風を調へ俗を化むることは、文より尚きことはく、徳を潤らし身を光らすことは、孰か學より先ならむと。爰に則ち庠序を建て茂才を徴し、五禮を定め、百度を興したまふ。〔大系五九頁〕

ここで云う「庠序」は、学校。「茂才」は、秀才の意味です。世の中が進歩・発展していくためには「文」、そして、「學」がいかに大切であり、必要であったかを歴史は私たちに教えてくれています。こうした精神や政策を継続し、遣唐使の派遣、大學・國學を造り、學問の奨励が奨められてきたのです。

大學では「明経道」と「文章道」の二つが中心で、中国の古典学習と漢詩文の創作が主たる學問でした。『論語』『孝経』『爾雅』『文選』『白氏文集』『史記』『三國志』などがテキストです。そして、平安時代になると「文章道」に力が注がれるようになり、多くの創作が編まれていきます。また、一冊の書籍をすべて習学するかわりに、いわゆる、さわりの部分を使い易く類別した「模範文例集」や「用語集」といったものが考案されていきます。成句や故事などを学習しやすく編纂しているのがそれです。以下に、現在に伝来する金言集の書を示しておきます。

○『祕府略』(天長八年(八三一)滋野貞主、一千巻(現存は数巻)
○『口遊』(天祿元年(九七〇))源為憲
○『世俗諺文』(寛弘四年(一〇〇七))源為憲

○『掌中歴』(十一世紀頃)三善為康

○『作文大体』(十世紀頃)編者未詳

このなかで、俗諺を記し集めたのが『世俗諺文』で、「千載一遇」「大器晩成」「傍若無人」「切磋琢磨」などといった現代人もなじみの深い言葉が多く見い出せるのが特徴と云えましょう。こうしたことばが行動の拠り所となり、規範となって日常生活の上に活用されていくのです。そして、出典は漢籍及び佛典が主になっております。

また、私學での教育も生まれておりました。綜藝種智院(天長五年(八二八)空海)、勧学院(弘仁八年(一二一二)藤原冬嗣)、奨学院(元慶五年(八八一)在原行平)などの私立学校も創設されています。そのなかで、書くことの重要性から「往来物」が編纂されるようになりました。その代表的なのが文章博士として有名な藤原明衡(九八九―一〇六五)の編纂に成る『明衡往来』(雲州消息とも)で、模範となる書簡文を編集したものですが、日常の諸行事・儀式・有職故実・民間風習などの知識の習得にも考慮して編集されています。百科知識をもりこんだ教科書です。また、習学の効果をも考慮して、排列にも特別の気配りを感じるものがあります。

佛教界とことば教育

また、平安遷都にして南都諸宗から独立した天台の最澄(七六七―八二二)、真言の空海(七七四―八三五)が開いた両寺院及び他宗の高学僧と檀那である天皇及び貴族たちとの修學上の関わりも頻繁に行われていきます。その事例として、道鏡の専恣を悪み山に隠遁した法相宗の玄賓僧都(七三九以前―八一八)は、桓武天皇の晩年に伯耆国から召し出されています。嵯峨天皇は即位した後に、毎年のように玄賓に書を送って存問し、玄賓の示寂する弘仁九年まで法服や施物を送っていることでも明らかです。嵯峨天皇の弘仁期の唐風文化を彩った漢詩・漢文集として、『凌雲集』『文華秀麗集』『経国集』といった勅撰集が表出しています。そして、清和天皇の貞觀期(八五〇年頃)になると唐風退廃文化の兆しが私家集の類を以て表出してきます。言い換えれば、文化の私人化的色彩を表出してくる時でありました。ここに、前回まで繰り返し触れてきた「かな文字」の創出の原点とも云える「五十音図」の制作が見え隠れしているのも事実です。何人かの創意には、まず悉曇学の素養が必要です。この結実には眞言密教が寄与しています。独創性溢れる意図をもって一つの卓越した個性で制作されながら、その人物と成立年代を知り得ないのは遺憾なことです。このなかで「かな文字」は一部寺院から宮廷貴族に受け渡され、果ては宮廷に仕える女流文学者の人たちにだけ、私的に温存され続けていたのです。六歌仙の第一に数えられる天台の名僧遍照(良岑宗貞八一六―八九〇)は、この視野に置いておきたい人物です。さらには、小野篁、在原業平(八二五―八八〇)がいます。こうした文化氣運の流れを明確な位置づけとしたのが菅原道真公(八四五―九〇三)の「遣唐使の停止」という建議でした。彼の撰集である『新撰万葉集』は、漢字文体の歌集であり、時近くして勅撰された『古今和歌集』はかな文体の歌集です。この選者である紀貫之は承平・天慶の乱前夜である二十年後にかな文体の「をとこもすなる日記といふものををんなもしてみむとするなり」の冒頭文で知られる『土左日記』を書き上げます。逆に乱の首謀者平将門を綴った『将門記』は将門にゆかりある東国僧が事の顛末を漢文体で叙述しています。国風文化という狭間で見え隠れする両様の作品群にその源流を見ることができましょう。

〈補遺HP一覧〉

http://www1.linkclub.or.jp/~yukos/dazaifu/person/linkmich.htm
http://www.tanimoto.to/km/index.htm
http://www.komazawa-u.ac.jp/~hagi/kokugo_syomonki10.htm

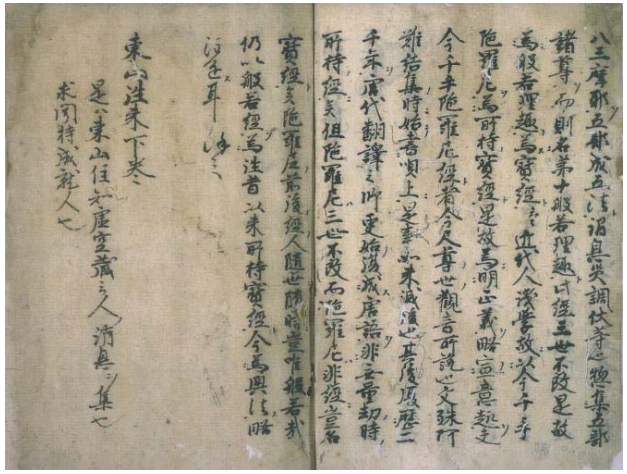
教育の教科書としての往來物

このような檀那である貴族と寺僧による問答形式の書簡のやりとりを集大成した寺往來としては、十一世紀の後半ですが、清水寺の別當定深(応徳三年(一〇八六)ー嘉承元年(一一〇六)頃)が編纂した『東山往來』(一〇八六～一一〇六年)があります。

これも、日常生活に関連した仏教諸法式や諸行事の取り扱い方のことを在俗に分かりやすく説き明かしていることが分かります。とはいっても、これら古往来と云われる文献資料は、全ての文字が漢字を用いた漢文体で書写され、訓読点などがあっても、見た目には実にとつきにくい形態を現代の私たちには見えてしまい敬遠されがちな内容になっております。

この古往來が実は後代の作品の基盤となって、鎌倉時代から室町時代初期になりますと数多くの古往來が更に登場してきます。

その代表的な資料としては、『鎌倉往來』『冨士野往來』『釋氏往來』『尺素往來』などが知られ、この後、尤も長期に亘って普及を遂げるのが『庭訓往來』は、現存古写本中、至徳三年書写の島根県出雲にある神門寺本が世に知られた資料です。



http://www.komazawa-u.ac.jp/~hagi/Ko-koen-touzanourai_houkoku.swf

往來物の語彙を所収する古辞書

こうした、書簡往復をまとめた往來物と呼ばれる教科書に付随する形で不十分さを補足する意味から、国語辞典、漢和字書の編纂が成されるのも当然のことでしょう。平安時代に編纂された古辞書を列挙してみると、

○『篆隷萬象名義』空海(三〇巻、九世紀)

○『新撰字鏡』　僧昌住(十二巻、十世紀)

○『倭名類聚抄』　源順(十巻、十世紀)

○『類聚名義抄』　編者未詳(三巻、十一世紀)

○『色葉字類抄』　橘忠兼(三巻、十二世紀)

これらの辞書を総称して、「古辞書」と呼びます。これらの「古辞書」については、次に「yestudy」を最大に利用しながら逐次自らが真摯に学習していきましょう。きっと大きな知力を養うことができることでしょう。

文献資料に見える漢文訓読法

最後にも一つ、漢文訓読による日本語的中国語の学習方法です。平安時代には仏家と博士家において、それぞれ独自の訓読点法が生まれています。「ヲコト点」という符号による漢文認識がそれぞれの場に応じて修學されています。その資料を総称して、「訓点資料」と云います。これもれっきとした日本語なのです。本年、岩波新書から山口仲美さんが『日本の歴史』という本をお出しになっています。

この本のなかで、「漢文訓読」について

「日本人が中国語で書かれた文章を消化吸収するため、一種の翻訳方法です。漢字に日本語の読みをあてはめて受け入れたために可能になった、巧妙な翻訳方法。《中略》原文の漢文に符号を書き込み、助詞・助動詞などを書き込んで、翻訳完了です。新たに、日本語の文章を書き起こしたりしない。翻訳に必要な作業を一つ抜かした、誠に効率的な消化吸収方法です。だから、日本人は短時間に漢文の内容を吸収できたのです」〔五六頁〕

と滑らかに説明されています。一読をお勧めします。

《補記》

※「え」の変体仮名には、漢字に遡ると「江」「衣」「盈」「要」の四種類があり、万葉仮名から考えて「衣・盈」がア行、「江・要」がヤ行のはずですが、一〇世紀前半までの平仮名文献がほとんど残っていないため、そのころ二種類の「え」を区別していたかどうかは不明です。古い平仮名資料として現在知られているものには、以下のようなものがあります。

讃岐国戸籍帳端書「有年申文（ありとしまうしふみ）」（八六七年）一部平仮名に類似する

教王護国寺檜扇橋落書　（八七七年）ホネ中三枚に平仮名類似字がある

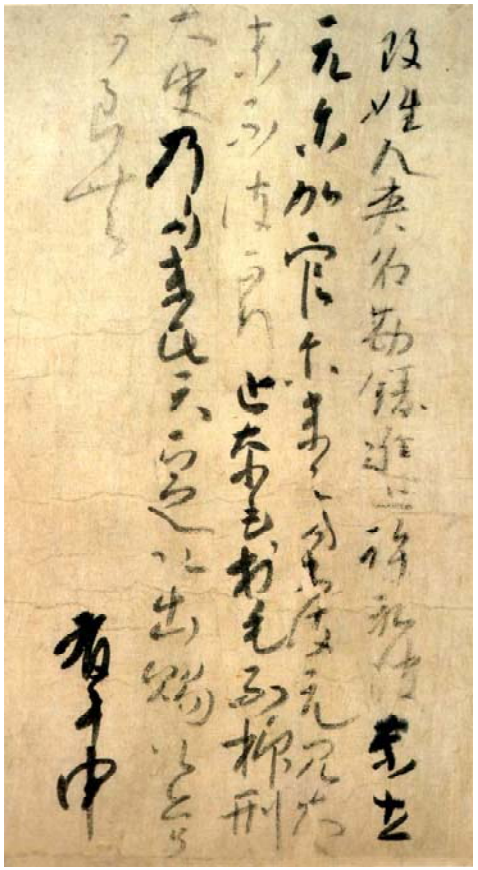
因幡国司解案紙背仮名消息（十世紀初）六行半

清涼寺釈迦如来像胎内文書（九三八年）二行半

醍醐寺五重塔天井板落書　（九五一年）

このうち、因幡国司解案紙背仮名消息には「江」が一回でてきます。ヤ行のエが期待される場所なので合っていますが、ア行のエが一回も出てこないのでこれだけでは何ともいえません。

左の図絵「有年申文」について、萱のり子さんが「仮名書の萌芽期における造形と運筆」のなかで「末之」と「奈毛」「末比」など所々で連綿線が現れている。各文字の最終画の収筆は、次に続く文字の始筆へ向けて放たれている。この収筆部分の運筆は、その前の部分と連動した円転する動きの延長上に現れてきている。連綿部の運筆では、前の文字の実画と次の文字の実画をつなぐ際に、一旦紙面から筆を離すという動作が省略される。実線でつながれた部分をみると「奈毛」では楷書の筆順による「毛」ではなく、草書の筆順がとられている。この筆順によって、「奈毛」の部分の運筆経路は短縮される」〔神戸大学表現研究第二巻第一号所収〕と説明しています。



※実際、「草仮名」で表記された最古の文献資料として知られている上野国立博物館蔵『秋萩帖』→『秋萩帖』を紹介しておきましょう。

◇解説　草仮名の遺品として著名な本巻は、“あきはぎの云々”

http://bunka.nii.ac.jp/ResultImage.do?heritageId=38181&imageNum=0&linkType=huge

の書出しから「秋萩帖」の名がある。第一紙と第二紙以下は筆者を異にし、和歌四十八首を草仮名で書いた後、巻末部分には王羲之書状の臨書がある。紙背に伏見天皇の花押があり、その遺愛の品と知られる。

◇解説　「玄賓僧都」備中国における玄賓生誕地伝説（PDF版）http://www.ritsumei.ac.jp/acd/cg/lt/rb/583pdf/harada.pdf

※参考資料

國語の歴史　http://members.jcom.home.ne.jp/w3c/kokugo/rekishi/

和漢二重複線言語・日本語の歴史　http://www.eonet.ne.jp/~mansonge/mjf/mjf-62.html

和字書体の歴史〔和様体〕http://www.alpha-net.ne.jp/users2/kinkido/Japanese/resume-waji.html